

「臨床判断力」を鍛え、 患者とともに“正しく”悩もう!

天野雅之

南奈良総合医療センター 総合診療科／教育研修センター

臨床判断は難しい。“ガイドラインがない領域”や、“価値観を踏まえた個別判断”ともなれば、その難しさは倍増する。この判断力は、各医師が経験を積み、長い年月をかけて個別に体得してきたものだ。しかし診療や教育の現場にも、「効率化」や「マニュアル化」が求められる時代になった。このギャップに苦しむ医師も多いと思われるが、「必要は発明の母」とも言われるように、これはむしろ“イノベーション”のチャンスかもしれない。

熟達医のもつ「まだ言語化されていない経験知」を若手医師に伝授できれば、若手医師は“中腹地点”まで一気に近道することができ、全世代で“さらなる高み”を目指せるのではないかと、熟達医のアタマの中を“のぞき見”させていただき、思考過程を“見える化”できれば、読者のみなさんのお役に立てるのではないかと、そうした思いから本特集を企画した。

思考過程の言語化という難題に対し、経営学の一分野である「意思決定理論」を用いて解決を試みた。執筆陣には、その道の熟達医と MBA（経営学修士）取得者やビジネススクールに在籍する医師をお迎えした。執筆者のみなさんのご尽力の



おかげで、充実した内容をお届けできると確信している。

「臨床判断力」を効率よく高めるため、ある医師が葛藤しながら臨床判断していくプロセスを“追体験”できるよう、誌面に工夫をこらした。同じフォーマットを用いてご執筆いただく

ことで、「どのように問題設定し、どのような選択肢をあげ、どのような情報を使って吟味したか」という思考過程を再現していただいた。導き出された結果は、読者のそれとは違うかもしれない。つい結論に飛びついて議論したくなるが、答えを急ぐのではなく、正解が1つではない状況における「思考過程」に着目して、じっくりお楽しみいただきたい。

価値観が多様化した現代において、患者中心性を担保するためにも、「選択肢を前にして、患者とともに悩む時間」は十分確保したい。そのためにも、“問題を捉え、選択肢をあげ、プロとしての推奨を立案する”という前段階については、熟達医の知恵をお借りして優柔不断に「サヨウナラ!」を告げてしまおう。本特集が、患者とともに“正しく”悩むための一助となれば幸いだ。



Editorial